



筑紫女学園大学リポジット

Nerval et Guillaume Tell de Rossini

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/567

ネルヴァルとロッシーニの『ギヨーム・テル』

間 瀬 玲 子

Nerval et *Guillaume Tell* de Rossini

Reiko MASE

I. 序

フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は1830年代から1850年代まで『プレス』紙 *La Presse* や『アルチスト』紙 *L'Artiste* などに劇評を発表していた。ガリマール社発行のネルヴァルのプレイヤッド版だけではなく、フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から新聞及び雑誌に掲載されたネルヴァルの劇評の電子テキストを可能な限り入手した。その結果ロッシーニの作品に関する劇評が多いことに着目した。ロッシーニに着目したもうひとつの理由は、ネルヴァルの有名な詩「ファンテジー」*Fantaisie* (1832) に次のような一節があるからである。

Il est un air, pour qui je donnerais
Tout Rossini, tout Mozart et tout Wèbre,
Un air très vieux, languissant et funèbre,
Qui pour moi seul a des charmes secrets.

Or, chaque fois que je viens à l'entendre,
De deux cents ans mon âme rajeunit...
C'est sous Louis XIII^e — et je crois voir s'étendre
Un coteau vert, que le couchant jaunit ; (1)

そのために私がすべてを与えてもよい歌がある。
ロッシーニも、モーツァルトも、ウェーバーもすべて
とても古く、やるせない、陰気な
私一人にとって秘密の魅力を持っている曲

ところで、私がたまたまその曲を聞いた時に、
私の魂は200年も若返る . . .

ルイ十三世の世 ― 私には広がるのが見える
夕日が黄色くする緑の丘；（後略）

このようにネルヴァルの心を揺さぶる古い曲と比べられている作曲家のひとりがロッシーニである。ネルヴァルにとってロッシーニの魅力は何であったのかも考察したいと考えている。

Ⅱ. ロッシーニに対する賛辞

ネルヴァルは序で述べたように詩「ファンテジー」で例として挙げただけではなく、劇評の随所で言及している。ジョアキーノ・ロッシーニ Gioachino Rossini は1792年に2月29日イタリアのパエザロで生まれ、1868年11月13日にフランスのパッシーで亡くなった。数多くのオペラ等を作曲したが、40代で音楽の世界から引退をしている。しかし晩年に創作意欲が復活し、小品を数多く発表した。

ネルヴァルはロッシーニの数多くの作品の中で、劇評で言及している作品は以下のとおりである。初演の年号を記載した。題名は日本語題名とネルヴァルが劇評で書いたとおりに記載している。原題とは違う場合もある。

『セビリアの理髪師』1816年 Barbier de Séville
『オテロ』1816年 Otello
『泥棒かささぎ』1817年 La Gazza ladra
『エジプトのモーゼ』1818年 Moïse en Égypte
『湖上の美人』1819年 La Dame du lac
『セミラーミデ』1823年 Semiramide
『コリントの包囲』1826年 Le Siège de Corinthe
『オーリー伯爵』1828年 Le Comte Ory
『ギヨーム・テル』1829年 Guillaume Tell

ロッシーニは驚くほどの多くの作品を残している。今でも1816年初演の『セビリアの理髪師』は上演もされており、また小学館 DVD BOOK 魅惑のオペラにも収録されている。しかしネルヴァルが言及した回数及び内容を精査すると、意外なことに『セビリアの理髪師』に関する言及が少ない。後に述べるように『ギヨーム・テル』に関する言及が圧倒的多数である。これはかなり不思議なことだと言えるであろう。

『ギヨーム・テル』の分析の前に1823年初演の『セミラーミデ』について言及をしたいと考える。『セミラーミデ』はヴォルテール Voltaire の『セミラミス』Sémiramis (1748) を原作としている。初演は1823年2月3日、ヴェネツィアのフェニーチェ座で行われた。ロッシーニのイタリア時代最後の作品である(2)この作品の主人公はアッシリアの伝説上の女王セミラミスである。セミラミスを

主人公にしたオペラは数多く存在する。ネルヴァルはヴォルテールの『セミラミス』そのものを劇評で言及している。本作品の登場人物は、セミラミス、アルザスまたはニニ阿斯、ミトラヌ（アルザスの友人）など少数である。ネルヴァルは『プレス』紙 *La Presse* 1850年8月19日号ではヴォルテールの台本を次のように引用している。

Oui, Mitrâne, aujourd'hui, l'ordre émané du trône...

Ou bien:

Quelle victime, ô ciel! a donc frappé ma rage! (3)

はい、ミトラヌ、今日、王位から発する命令

または：

何という犠牲者が、おお天よ、私の激怒を襲ったことか！

ブレイヤッド版の注に書かれているように、上記の引用の1行目は『セミラミス』の第1幕第1場の最初の行である。セミラミスの宮殿においてアルザスとミトラヌが会話をしている。そして引用の3行目は『セミラミス』の5幕8場にある。『セミラミス』の台本と照合すると多少違っている。

1行目 Arzace アルザスのせりふ

Oui, Mitrane, en secret, l'ordre émané du trône,

3行目

Quelle victime, ô Ciel, a donc frappé ma rage! (4)

はい、ミトラヌ、秘密裡に王位から発した命令

何という犠牲者が、おお、天よ、私の激怒を襲ったことか！

ネルヴァルは自分の記憶により、ヴォルテールの『セミラミス』を引用したと考えられる。しかしここで注意すべき事は、ネルヴァルが18世紀のヴォルテールの悲劇を考察するに際し、17世紀フランスの劇作家コルネイユ Corneille やラシーヌ Racine と比較しながら論じていることである。ネルヴァルの劇評の土台はこのようなフランス古典劇であることを再認識するべきであろう。

ロッシーニの『セミラーミデ』はすでに言及したように1823年の作品である。台本はガエターノ・ロッシ Gaetano Rossi がイタリア語で執筆した。2幕9場の作品である。ロッシーニのイタリア時代最後の作品である。『セミラーミデ』の登場人物は以下のとおりである。

セミラーミデ バビロンの女王、亡きニーノ王の妃

アルサーチェ セミラミデ軍の士官

アッスール 王子、バール神の末裔
イドレーノ インドの王
オローエ 祭司長
アゼーマ 王女、バール神の末裔
ニーノ王の亡霊
ミトラーネ 親衛隊長

1846年10月5日『プレス』紙では「イタリア座『セミラーミデ』」Théâtre-Italien. —*Semiramide* の記事に次のように書いている。

Semiramide est certainement un chef-d'œuvre, mais il faut reconnaître que notre Théâtre-Italien ne peut attendre la continuation de sa brillante fortune que d'opéra plus modernes. En Italie même les partitions classiques cèdent la place aux tentatives des jeunes maestros... (5)

『セミラーミデ』は確かに傑作である。しかし我らのイタリア座はもっと現代的なオペラにのみ輝かしい幸運の継続を期待できることを再認識すべきである。イタリアですら、古典的な楽曲は、若い大作曲家に席を譲っている。

この記事では、ネルヴァルが『セミラーミデ』を鑑賞した当日のテノール歌手が炎症を起こしており、あまりよい出来ではなかったことも劇評に影響しているのかもしれない。ネルヴァルが劇評で言及している歌手たち、コレッティ Coletti、ロンコーニ Ronconi は当時活躍したオペラ歌手である。特にアッスールを演じたコレッティの歌唱力を絶賛している。(6)イタリア座ではイタリア語の作品が上演され、イタリア人が歌手として登場していた。(7)ここで特記すべきことはネルヴァルは『セミラーミデ』を傑作と評価しても、そこには時代の移り変わりも明言をしていることは認識しておく必要がある。

Ⅲ. 『ギヨーム・テル』に対するネルヴァルの評価

すでに述べたようにネルヴァルが言及したロッシーニの作品の中で圧倒的多数を占めるのが『ギヨーム・テル』である。本作品はロッシーニ作曲、台本はエティエンヌ・ド・ジュイ Étienne de Jouy とイポリット＝ルイ・フローラン・ビス Hippolyte Louis Florent Bis が担当し、フランス語で書かれている。原作はフリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller の『ヴィルヘルム・テル』Wilhelm Tell (1804) である。(8)

『ギヨーム・テル』は1829年8月3日、オペラ座（ペルティエ）で4幕物として上演された。舞台はスイスのビュルグレンである。登場人物は以下のとおりである。

ギヨーム・テル Guillaume Tell スイスの独立を願う愛国者
アルノール Arnold スイスの愛国者だがマティルドと恋に落ちる
マティルド Mathilde オーストリアのハプスブルグ家次女
ジェスレル Gessler オーストリアから派遣されている地方総督

『新グローブオペラ事典（普及版）』には『ギヨーム・テル』の台本に関して重要な事が書かれている。(9)

- (A) 1829年初演当時の台本にロッシーニ自身が手を加えている。
- (B) 1829年のオペラのリハーサル段階以前に台本が出版された。
- (C) リハーサルの段階で変更された箇所が台本に反映されていない。
- (D) 正確な校訂版を入手しないと、1829年の初演の様子を研究することができない。
- (E) ロッシーニは縮約版を作成した。1831年に縮約版の初演が行われた。
- (F) 1837年4月17日の三幕縮約版の改訂稿による上演が非常に重要である。アルノール役をジルベール・デュプレが歌った。
- (G) 1856年に4幕稿がパリで復活した。(ネルヴァルは1855年に亡くなっている)

これからネルヴァルの『ギヨーム・テル』に関する劇評を分析するが、上記の記述を考慮すると、ネルヴァルがパリの劇場で鑑賞したのは3幕縮約版を見た可能性が大である。

それではネルヴァルの劇評を具体的に見てみよう。『プレス』紙 1838年5月21日号に「オペラ」Opéra と題してネルヴァルは劇評を発表している。その中で次のように書いている。

Duprez chantait Arnold dans *Guillaume Tell*; son succès a été foudroyant. Mme Dorus s'est fait aussi vivement applaudir dans le rôle de Mathilde; personne ne l'égale pour la perfection et l'excellence de la méthode; et de plus, elle est blonde, qualité rare. (10)

デュプレは『ギヨーム・テル』でアルノールを歌っていた。彼の成功は電撃的なものであった。ドリュス夫人もマティルドの役で激しく拍手された。誰も完璧さや手法の優秀さで肩を並べる人はいない。さらに彼女は希なる質のブロンドである。

ここで言及されているジルベール・デュプレ Gilbert Duprez (1806-1896) は当時活躍したテノール歌手である。19世紀当時の書物によると、デュプレは1837年4月17日、当時のオペラ座で上演された『ギヨーム・テル』に出演し、大きな評価を得た。(11)またフランス国立図書館電子テキストサイトには1839年当時のデュプレの風刺画が収録されている。顔が異常に大きく、また目、鼻、開いた口が強調されている。それに比べると首から下がかなり貧弱である。(12)上記の書物にはドリュス夫人の項目もある。当時のオペラ座の最も繁栄した時代を支えた人のひとりであるという評価を受けている。(13)

さて次に『プレス』紙1840年6月29日号の「オペラ座」Théâtre de l'Opéra に関する記事の中でネルヴァルは次のように書いている。

Quatre jours avant, à la représentation de *Guillaume Tell*, M. de Jouy s'était écrié que le *suivez-moi!* ...était le mot le plus sublime qu'il eût mis au théâtre, et le seul qu'on pût comparer au *qu'il mourût!* de Corneille. (14)

4日前『ギヨーム・テル』の上演でジュイ氏（『ギヨーム・テル』の台本作家のひとり）は「私についてきてください！」は彼が演劇で書いた最も崇高な言葉であり、コルネイユの「彼が死ぬ」と比較できる唯一の言葉だと叫んだ。

まず引用文中の「私についてきてください」は『ギヨーム・テル』の3幕縮約版であれば、3幕2場のアルノールのせりふである。(15)もし4幕版であれば4幕2場である。(16)台本を比較する際、上演年に最も近い台本を選定した。3幕縮約版も4幕版もこのシーンはアルノールのせりふであり、違いはない。ここで驚くのは、ネルヴァルが17世紀の古典劇作家コルネイユの『オラース』Horace 3幕6場の老オラースのせりふと比較していることである。『オラース』はコルネイユの四大悲劇のひとつである。1640年の作品であり、紀元前のローマ対アルバの戦いを題材としている。ネルヴァルが引用したせりふの場面には老オラース（ローマの騎士）、サビーヌ（オラースの妻）、カミーユ（オラースの妹）、ジュリー（ローマの婦人）が登場する。このすさまじい殺し合いの悲劇を象徴するのが次のせりふである。

Qu'il mourût, (17)

死ぬのだ。

以上のようにネルヴァルはロッシーニの『ギヨーム・テル』のせりふをコルネイユの有名なせりふと比較するほど高く評価している。

最後にネルヴァルが『プレス』紙1845年7月21日号に「コメディ・フランセーズ」Comédie-Française と題して劇評を発表した。その中に次の一節がある。

On a applaudi en échange *Guillaume Tell* et son *suivez-moi* laborieux; l'énergie républicaine appliquée à la production mâle d'un *ut* de poitrine ne séduira jamais bien profondément les masses.

(18)

人々は代わりに『ギヨーム・テル』とその骨の折れる「ついてきなさい」に拍手を送った。胸部の *ut*（音楽用語、C音、ハ音、ド音）の男性的な生産に共和国のエネルギーを応用すること

は、大衆を深く魅了することは決してないであろう。(19)

確かに聴衆は『ギヨーム・テル』に対して拍手を送っている。しかし数年前の劇評に比べると多少陰りが感じられるような内容である。この劇評を読むと、『ギヨーム・テル』の人気は、当時のパリの時代背景と密接に関係があると考えている。だから共和国のエネルギーなどという表現が劇評に出てきてしまったのであろう。

IV. 結論

以上のようにネルヴァルが多くの劇評を書き、絶賛した『ギヨーム・テル』の分析を行った、ネルヴァルが実際に見たであろう舞台そのものの舞台背景や舞台衣装の電子版を入手することは叶わなかった。しかしネルヴァルが聴いたであろうオペラ歌手の詳細な事項は調べることができた。またネルヴァルが鑑賞した『ギヨーム・テル』の台本を特定することは困難ではあるが、4幕物の電子テキストと3幕物の電子テキストは入手することは可能であった。今後も益々台本、舞台衣装・舞台装置等の図版の電子化が進むであろうと考えている。それによりネルヴァル研究の新たな展開が期待できると考えている。

そして序で書いたネルヴァルの「ファンテジー」になぜロッシーニが登場するのか？この謎はすべて解明できたわけではない。しかしネルヴァルにとって舞台上の『ギヨーム・テル』の「ついてこい」というせりふが強く頭の中に残り、それがネルヴァルの作品生成に大きな影響を与えたと現時点では考えている。

本論文を執筆するに際し、以下のブルーレイディスク、DVD、CDを参考にした。

Guillaume Tell

1) DVD ロッシーニ 歌劇『ウィリアム・テル』全曲 (Opus Arte)

指揮 リッカルド・ムーティー

グリエルモ・テル ジョルジョ・ザンカナーロ

1988年 ミラノ・スカラ座におけるライブ収録、イタリア語版 (イタリア語字幕付き)

基本情報、あらすじ、ロッシーニの人生が書かれたブックレット付き

当時の記録によると、1988年12月7日、10、14、17、20、23、27、30の合計8回上演された。アーノルドが難役であるにもかかわらず、クリス・メリットが8回すべてを演じた。

2) DVD ロッシーニ 歌劇『ギヨーム・テル』 (Decca)

指揮 ミケーレ・マリ奥特ティ

ギヨーム・テル ニコラ・アライモ

2013年8月 ペーザロ ロッシーニ・オペラフェスティバル

フランス語版 (フランス語字幕付き)

英語、フランス語、ドイツ語によるブックレット付き

3) DVD 『ギヨーム・テル』 (Bongiovanni)

指揮 アントニーノ・フォリアーニ

ギヨーム・テル アンドリュウ・フォスター＝ウィリアムズ

2013年7月バート・ヴィルトバートで開催された第25回ロッシーニフェスティヴァルで録音
フランス語版（フランス語字幕付き）

ブックレット付き

Semiramide

1) ブルーレイディスク (DYNAMIC)

演出・装置・衣装：ナイジェル・ローリー

指揮：アルベルト・ゼッダ

セミラーミデ：ミルト・パパタナシウ

アルサーチェ：アン・ハレンベリ

フランダース歌劇場交響楽団&合唱団

2011年1月 フランダース歌劇場（アントワープ）におけるライブ収録

イタリア語歌唱

2) CD (NAXOS)

指揮：アントニーノ・フォリアーニ

セミラーミデ：アレックス・ベンダ

アルサーチェ：マリアンナ・ビッツォラート

ヴィルトゥージ・ブルネシス、ボズナニ、カメラータバッハコーラス

2012年7月18日、19日、22日 第24回バート・ヴィルトバート、ロッシーニ音楽祭での録音

イタリア語歌唱

（バート・ヴィルトバートはドイツの都市名。1989年からロッシーニ音楽祭が行われ、生地ペーザロと並び立つようになった。）

なおその他の作品に関しては、『セビリヤの理髪師』『オテロ』『泥棒かささぎ』『湖上の美人』『オリー伯爵』はDVDで鑑賞した。『エジプトのモーゼ』と『コリントの包囲』はCDで視聴した。ロッシーニの作品は現在でも上演され、またDVD、ブルーレイディスク、CDにより鑑賞または視聴することが可能である。ネルヴァルが言及しなかった作品に関しても同様である。

本文で言及した小学館 DVD BOOK 魅惑のオペラ 第9巻、池辺晋一郎、石戸谷結子、水谷彰良『セビリヤの理髪師』2007年にはロッシーニの人生、ロッシーニのオペラ作品一覧表（初演年、初演地）、簡略な年譜が記載されているので、本稿を執筆する際に参考にした。

注

- (1) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p. 339. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. I と略す。PL. I, pp. 1635-1638の注も参考にした。翻訳する際に『ネルヴァル全集 I 文壇への登場』筑摩書房、2001年に収録された田村毅訳「オドレット」を参考にした。また田村毅氏による注解も参考にした。Gérard de Nerval, *Les Chimères, La Bohème galante, Petits châteaux de Bohème*, Paris, Gallimard, coll. 《Poésie》, 2005, p. 87 et pp. 355-356.
- (2) スタンリー・セイディ 『新グローブオペラ事典（普及版）』白水社、2011年、pp. 375-378を参考にした。また Félix Clément et Pierre Larousse, *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, Paris, Administra-

- tion du Grand Dictionnaire universel, 1867-1869, pp. 616-617を参考にした。なお本書はフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から入手し、廉価版も購入した。なおこの辞典では項目名が SÉMIRAMIS となっている。Gustave Kobbé, *Tout l'Opéra*, traduit de l'anglais par Marie-Caroline Aubert, Denis Collins et Marie-Stella Pâris, Paris, Robert Laffont, coll. 《Bouquin》, 1980, pp. 732-733及び Joël-Marie Fauquet, *Dictionnaire de la musique en France au XIX^e siècle*, Paris, Fayard, 2003も参考にした。ロッシーニのオペラの中でフランス語で台本が書かれた作品名、もととなった作品の一覧表が掲載されている。また西原稔『世界史でたどる名作オペラ』東京堂出版、2013年は世界史をオペラで学ぶという点で非常に参考になった。
- (3) *La Presse*, 19 août 1850.『プレス』紙は Gallica に収録されている。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》1984, p. 1175 et p. 1770. プレイヤッド版ではヴォルテールの台本の箇所がイタリック体で表記されているが、『プレス』紙ではイタリック体ではない。プレイヤッド版は『プレス』紙を忠実に再現しているわけではない。
- (4) 『プレス』紙1850年8月19日号における劇評の対象はヴォルテールの作品『狂信あるいは予言者 マホメット』*Le Fanatisme ou Mohomet le Prophète* である。しかし劇評で引用されているのは『セミラミス』の一節である。Voltaire, *La tragédie de Sémiramis*, Paris, Le Mercier, 1749, p. 33 et p. 105 (Gallica) を参考にした。Voltaire, *SEMIRAMIS* tragédie en cinq actes et en vers, Paris, Delalain, 1777も参考にした。
- (5) *La Presse*, 5 octobre 1846. PL. I, p. 1075は題名の表記が元の記事と多少異なっている。
- (6) フィリッポ・コレッティ Filippo Coletti (1811-1894) はイタリアのバリトン歌手であった。しかも各国で活躍した有名な歌手であった。1846年はパリで上演されたオペラに出演した。ジョルジオ・ロンコーニ Giorgio Ronconi (1810-1890) はイタリアのバリトン歌手であった。
- (7) フランソワ・ブリュネ、黒木朋興 訳「テオフィル・ゴーチエとパリのオペラ」澤田 肇、吉村和明、ミカエル・デブレ共編『テオフィル・ゴーチエと19世紀芸術』上智大学出版、2014年、pp. 157-186を参考にした。
- (8) *Guillaume Tell*, Opéra en quatre actes, poème de MM. Jouy et Hippolyte Bis, musique de M. Rossini, La Haye, chez H.S.J. De Groot, 1835を台本として参考にした。また3幕物としては *Guillaume Tell*, Opéra en trois actes, paroles de MM. Jouy et H. Bis, Musique de Rossini, Paris, Tresse, 1848を参考にした。*Guillaume Tell*, Opéra en quatre actes, paroles de MM. Jouy & Hippolyte Bis, musique de Rossini, Paris, Calmann-Lévy, 1906 (ネルヴァルの死後に出版された書籍の廉価版) も参考にした。なお『ギヨーム・テル』に関しては注(2)で紹介した *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, Paris, Administration du Grand Dictionnaire universel, 1867-1869, pp. 331-334では数ページを割いて、数多くのセリフを引用している。また同じく注(2)で紹介した『新グローブオペラ事典 (普及版)』, pp. 244-248ではロッシーニがいくつかの作品の中からシラーの作品を選んだ経緯が書かれている。また『ギヨーム・テル』の初演時の様子、そして4幕版だけではなく3幕版の存在などが詳しく書かれている。また同じく注(2)で紹介した『世界史でたどる名作オペラ』, pp. 196-200ではウィリアム・テルの伝説とハプスブルク家の関係、オペラの基本情報、オペラの概要が簡潔にまとめられている。澤田肇『フランス・オペラの魅惑』上智大学出版、2013、pp. 95-104では『ギヨーム・テル』の基本情報、見どころ・聴きどころ、推奨CD、登場人物、幕ごとのあらすじ、作曲家ロッシーニについて、作品の解説、ドイツの国民的詩人シラーについて詳しく書かれている。Gustave Chouquet, *Histoire de la musique dramatique en France depuis ses origines jusqu'à nos jours*, Paris, Librairie Firmin Didot Frères, 1873, pp. 394-395には1837年4月17日、3幕縮約版の再演、そして本文で言及をしているジルベール・デュビュレのデビューが記載されている。
- (9) 『新グローブオペラ事典 (普及版)』, pp. 244-248.
- (10) *La Presse*, 21 mai 1838. PL. I, pp. 405-406.

- (11) Burat de Gurgy, *Biographie des acteurs de Paris*, Paris, chez les éditeurs rue Grange, 1837, pp. 4-9. 本書は表紙には筆者名が書かれていないが、本の後ろのほうに手書きで筆者名が書かれている。
- (12) Gilbert Duprez dans le rôle d'Arnold dans "Guillaume Tell" de Rossini, Impr.d'Aubert, 1839. 出版地は記載されていない。
- (13) Burat de Gurgy, *Biographie des acteurs de Paris*, pp. 3-4.
- (14) *La Presse*, 29 juin 1840. PL. I, p. 584.
- (15) *Guillaume Tell*, Opéra, en trois actes, d'après de MM. Jouy et Hyppolite Bis, musique de Rossini, Amsterdam, Tetroode, 1835, p. 56.
- (16) 注(8)で紹介した *Guillaume Tell*, 1835, p. 43.
- (17) Corneille, *Théâtre II*, Paris, GF Flammarion, p. 330. 翻訳をする際に、コルネイユ、岩瀬孝 他訳『コルネイユ名作集』白水社、1975年に収録された伊藤 洋訳『オラース』を参考にした。
- (18) *La Presse*, 21 juillet 1845. PL. I, p. 959.
- (19) ut de poitrine: ut は音階のド、ハ音、C音を表す、ut de poitrine はある種のテノール歌手が出すことのできる非常に高い音のことであり。本文中に登場するジルベール・デュブレは力強いテノール歌手として有名であったとされている。

謝辞：本研究は JSPS 科研費25370391の助成を受けたものです。

(ませ れいこ：英語メディア学科 教授)